



「かいはつ」第13号(題字 葵中2年)
岡崎市特殊教育推進協議会
昭和60年7月26日発行
写真:矢作東小 研究発表会より



一輪車と

子どもたち

特殊教育部長

伊沢 昭

心身に障害のある「さくら」「すみれ」組の子どもたち、一人ひとりみんな精いっぱいの学校生活を繰り広げている。

特殊学級用として、一輪車を二台購入した。楽しく遊びながら、運動・体力等の増進をねらった遊具で活用も大変だろう。そして、危険も伴うし、慎重に取り扱いたいと思っていた。

A君とN君が四月以来、最初は廊下の窓枠伝いに、おぼつかない所作で、恐る恐る一輪車と遊んでいた。一米も進むと倒れるころぶ。「あぶない」と自然に声も出る。子どもたちは、喜々として楽しさいばいである。

六月に入って、手放しでぶつかることなく、軽快に乗り廻している。「びつくりする」まさか、こんなに早く一輪車に乗って、サーカス風にこなすとは思ってもいなかった。

子どもたちは、素晴らしい力を持ち合わせているのだ。この運動神経たるや、抜群である。与えてよかった、笑顔で乗り廻す動作に、改めて目を見張つたものである。クラスの雰囲気も明るく、助け合う、協力し合う芽も伸びてくる。「じっくり」観察して、実状、個性を把握しなければならぬ。何をしていたらよいか、どうすればよいかを、教師は考えて取り組みたいものである。

親子料理教室

福岡小 糟谷京子

親同志、また、親と教師

の共通理解を深める

「お母さん、エプロンしてよ。」とT男。「お鍋やしゃもじを持ちに行くよ。」お湯を先にかけて方がいいわね。」とお母さん達。エプロン姿の豆コック達は、にこにこ顔でお母さん達と、道具を運び、材料を洗ったり、切ったり、活躍し始めた。

親子料理教室の

はじまり

昨年十二月、懇談会の代わりに、関東煮とお好み焼きメニューで、昼食会を開いたのがきっかけ。今まで、自分の子供だけを見つめて、ひとりイライラしていたSの母親が、「楽しかった。お母さん方と親しくなれてよかった。」と、うれしいことばを残してくれた。担任と子供だけの結びでは、指導に限界があり、親の協力を求めるわけであるが、その親がひとり子供への障害について悩み、暮らしているのでは、よい結果は得られない。そこで、母親を含めた学級づくりをしたいと考え、始めたものである。



初回、材料全て教師の手で用意したが、今回は、全て、お母さん達の手で行われた。K男の母親が中心になり、日時を決めK男の家

で話し合ったらしい。世間話をしなが、買い物に出かけ、子供の悩みを打ち明ける場にもなったらしく、カレーを作る時には、母親同志が打ち解け合っており、他児に接する態度にきこちなさが消えていた。どの子も、思わぬ行動を

とることをお互いに体験をしなから、子供に少しでも多く参加させようと努力した母親達であった。台所仕事をさせたのは初めてというTの母親の「先生は、ひとり毎日、大変ですわね。」ということ

ばに、母親達が皆うなづいた。親同志、また、親と教師との学級の子供達に対する共通理解が深められ、子供の成長のための力となり互いの心の支えとなるような学級づくりをめざしている。職員室でお世話になる先生方にも食べていただきたいと、カレーライスの大盛とサラダを届けてくださったお母さん達の気配りがうれしかった。

「うまい」とも「おいしい」とも言うのではないが、口一杯に押し込み、もくもくと食べ、おかわりをする子供の顔に、笑みが浮かびそれを見守る母親の顔には、疲れは見られるものの喜びを見いだすことができた。「月に一度は、こんな会が開きたいわね。」と計画され、間もなく七月の料理教室が行われる。また、学級園を親子園と名付けて、親子で野菜づくりを始めた。収穫祭を兼ねた料理教室も計画している。親子共に楽しみとなる活動を考え、今後も続けていきたい。

みどりノート(家庭連絡)で、てたこと、母親が作ってくれたT男の母親から次のようなことを知らせてきた。

「土曜日、十二時半頃帰ってきたT男が、うれしそうな顔で『お母さん、あした山へ行こう』と言うのです。何のことかよくわからなかったがよく聞いてみると、京が峰の頂上へみどり学級の旗を立ててきたので見に行こうと言うのです。あくる日、T男と私と主人の三人で京が峰へ登りました。みどり学級の旗の下でおにぎりを食べながらT男が、学校から長い竹竿をみんなで見つけて頂上まで運んだことや、N夫君が木に登って旗をしぼりつけたことなど、矢つぎ早に話してくれました。T男が、こんなに楽しそうにしゃべってくれたことは初めてです。」

自然の中で学ぶ

功

山

小丘

自然の野山を走ったり歩いたりすること、それ自体が子どもにとって楽しい体験です。ですからこうした自然の中の活動をくり返すことで、子どもたちにさまざまな体験をもたせ、興味や関心を抱かせていきます。その興味や関心をもとに、いろいろな学習活動を広げていくことで、T男の例のように、語いも豊かになつていくことは確かです。自然はすばらしいことを教えてくれます。私たち教師は、あまりにも教室のないひとり遊びをやっているという枠組にとられすぎてはいないでしょうか。

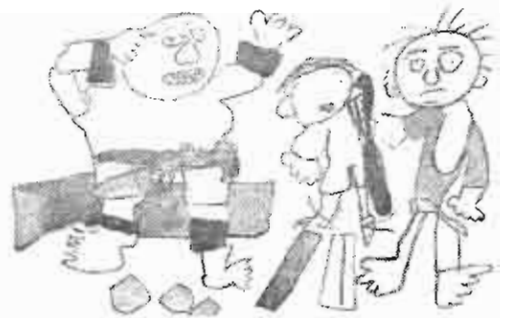
ふだん教室の片すみで、動きのないひとり遊びをやっているT男が、生き生きとしていたと言うのであった。つまり、みなで京が峰の頂上へ学級旗を立て

子どもの作品

たのしかったしやうせりよこ
 こつろくえんて
 レジストコースターに
 乗りました。
 下にいったり
 下につたりしたから
 こわかった。
 はらばたがキュンとなったり
 フワフワと空へとんで行く。
 ぼくは
 ギャーキャー、こいつてしましま
 した。

ぼくは
 なきをうでした。
 しんじまをうでした。
 ぼくは、
 きんらうしりました。
 だて、
 またやりたいなあ
 シェットコースターに、

(甲山中三年)



「力たろう」のお話の絵です

(矢東小六年)



「ばけくらべ」のお話の絵です

(羽根小二年)

学級スナック

土がすき

花がすき

竜美丘小六組

ぼくたちは 外がすき。
 ぼくたちは 土がすき。
 わたしたちは 花がすき。
 わたしたちは、
 花をそだてるのがすき。

マリーゴールドの苗を
 プランターに植えた。
 あせが いっぱいでた。

五十この プランターに
 二百本 植えた。

ぼくたちのマリーゴールド
 一つ さくかな。

さいたら 校門前にならべて
 みんなに 見てもらおう。



昭和五十四年に、養護学校の義務化が実施された。以後、各市に就学指導委員会が組織されて、障害を持つ子たちの就学指導がきめ細かく実施されるようになった。昭和五十六年は「完全参加と平等」をテーマに掲げ、国際障害者年と位置付けて、心身障害を持つ人々への理解が深められてきた。

特殊学級や、養護学校の子たちが、いじめられたり肩味の狭い思いをして、教室で小さくなっていた二十年前、今はなき大山康夫先生と特殊教育に取り組んでいたところと比べると、世間のべつ視も消えて、社会参加が

あたりまえとなってきた。時代の流れを感じる。

今、障害の重い子たちが養護学校で学んでいる。一学級六名といつても多動の子もあり、六人六様である。先生方はこの子たちに愛

共に学ぶ努力を

愛教大附属養護学校

副校長 神谷宣行

情をこめて指導にあたっている。適確な指導を進めるためには、ま

ず子供の特性を把握することが基本となる。これは子供たちが見せる、ものとのらえ方感じ方、興味や関心をこまめに記録し、子供の

め細かく育てる努力が、根気強く積みあげられている。

いずれにしても、発達の遅れを持つている子たちである。学校と家庭が理解し協力しあうことが、社会的自立を目指すためには、何

よりも必要なことである。

朝、登校すると「おはよう」と元気なあいさつをする子たちである。教室で接する、この子たちは素直で純粋な気持を持っている。子供たちのよさは、知的にできる、できないとか、早い遅いとかいう比較を超えたところにある。能力によって決め

付けるのではなく、優しさや思いやりの心が人間にとって尊いものであることを、子供を通して私たちは学ばねばならない。

今後とも、私たちはこの子たちの指導を通して、共に学ぶ姿勢を忘れることなく、特殊教育の充実と発展に努力して行きたい。

能力や障害に合わせた

学習の工夫

根石小 片山 美恵子

私のおりました連尺小には、遅進児の学級が二学級あり、(当時 は少なかつた)学年プラス能力による、低学年と高学年の編成でした。若葉学園と共に転任された磯貝先生の後に、西尾市より古沢朝海先生が来られ、いろいろご指導を受けながら、私が高学年学級を担当しました。

四年生以上の高学年といつても学力はそれに合わないで、時には低学年学級といつしよに能力別編成で、国語と算数を中心にグループまたは個別学習をさせたり、時には生活単元学習の計画にそつて行事や季節にあわせた学習をさせたり、のれんやカレンダー作り、簡単な手芸、花だんや飼育などの作業学習をさせたり、いろいろな試みをしました。絵日記や日記はほとんど毎日書かせました。

能力別学習は、共通単元または共通教材を組み合わせ、能力別に指導計画や時間ごとの展開を考えて、同じ時間に学習させる試みです。例えば、算数の「分数」では

だけ伝統行事を取り上げ、楽しみなから学習をさせるようにしました。

当時の授業風景から



数図と積木のマッチング

ない時のむずさしさなど、大変でしたが、効果は上がったと思っております。

行事を中心とした学習は、いわゆる合科学習です。七夕では、文字は国語、歌は音楽、かざりは図工といった具合です。お月見だんごを作ったりもしました。できる

カレンダー作りは、毎年二学期恒例として取り上げる学習でした。完成した作品は、関係各方面へ送らせていただきましたが、手作りの味として、それなりに好評だったと思っております。古沢先生のご指導の下で、二学級合同で作りました。石こう、紙、木と年によっているいろいろでした。石こうの時は木枠を作りその中に石こうを流して固め石こう板を作ってから、絵や字を彫るものです。紙の方は、絵はいいのですが、数字は何枚も切つて、木の台に積み重ねて貼つていくのです。それぞれに困難な作業でしたが、能力に応じた作業で子どもたちはよくがんばりました。みんなで作る楽しさ力強さをこの学習を通してわからせることができたように思います。

その他、日誌や通知票の作成、普通学級との交流、親との毎日の情報交換、市外の特殊学級との文通など。思い出すことはまだまだありますが、ともかく一進一退の子どもたちに喜び、また悩みの日々だったように思います。

昭和六十年 岡崎市就学指導委員会 委員と活動

- ・井上 泰夫 岡田病院副院長
 - ・杉浦 寿康 小児科医(能見)
 - ・池田 勝昭 愛教大助教授
 - ・安藤 豊 岡崎児童相談所長
 - ・岡村 正 岡崎養護学校校長
 - ・丹羽 辰夫 安城養護学校校長
 - ・山崎 正虎 岡崎盲学校校長
 - ・富田 守雄 岡崎聾学校校長
 - ・伊沢 昭 矢東小学校長
 - ・林 勝巳 大門小学校長
 - ・太田 清美 市教委指導部長
 - ・山本 実 市福祉部長
 - 五月 特殊学校見学会 三校
 - 六月 就学指導説明会
 - 七月 児童実態調査 教育相談会
 - 九月 障害児調査報告書作成
 - 十月 教育相談会 七回
 - 十一月 就学指導委員会 四回
- 在学生の就学指導もおこないます。

親子の集い

本年度も昨年度に引き続き「運動会」を計画しています。
一、期日 九月九日(月)
一、会場 岡崎市体育館

こころに ゆとりをもつて

美川中 野村 正文

学校へでてきても教室に入れず、教師や他生徒が近づけば逃げ隠れる。家に帰れば親に叱られると、いつてピクピクして生活していた。二年生当時の日の状況であった。最近の彼は、行動には、ごちなさが見られるが落ちつきを取り戻してきた。それとともに前向きに授業に参加することができるようになってきた。彼の生活ノートからその一端がはかり知れる。

「……おとうとは、びょういんにいます。おかあさんがいえにいません。おとうさんはなています。とてもさびしいです。ぼくも、おとうとにあいたいです」

私たちがとつてもこころのゆとりが必要ではないでしょうか。毎日の児童・生徒とのかかわりの中で、多くの悩み、不安をかかえているのではないのでしょうか。一人よりは二人、二人よりは三人と、一人でも多くの先生方と話し合う機会をもつてはみませんか。子ども側に立った見方・考え方が出発点です。明日の指導への手がかりを誓ってさげしてみましよう。